

6-2 現地調査

6-2-1 スリランカ

1) 趣旨

2004年12月26日にインド洋で発生した津波により、スリランカは死者30,959人、行方不明者5,443人、避難者数約555,000人に上る激甚な被害を蒙った。(2月4日現在 OCHA 調べ)

アジア防災センターは、被災直後の12月29日から1月4日の7日間、現地で調査を行った。調査の目的は次の通りである。

- (1)スリランカにおける津波被害の現状と関係機関の活動状況を把握すること
- (2)今後の支援のためのニーズアセスメントを行うこと

2) 派遣期間

2004年12月28日～2005年1月5日

3) 調査派遣者

寺西 章浩 (アジア防災センター 主任研究員)

スリガウリ・サンカル (アジア防災センター 客員研究員)

シシラ・コロンバゲ (アジア防災センター アシスタント)

4) 調査内容

月 日	調査箇所	内容
12月28日	関空発	—
12月29日	コロンボ着 (未明) 国家災害対策センター JICA事務所 日本大使館 現地NGO UNDP	関係機関を訪問し、調査目的と予定行程を伝えるとともに、現地の被災状況、交通手段、治安状況等について情報収集した。
12月30日	ヒッカドゥア ゴール	コロンボから海岸沿いにゴールを目指して南下した。途中で住民インタビュー、列車転覆現場の状況調査を行った。 ゴールでは、政府地方機関、避難所を訪れ、救援状況や課題について事情を聴取した。 また市内及び近隣の漁村の被災状況を調査し、住民にインタビューを行った。
12月31日	コロンボ市内	移動の準備
1月1日	トリンコマリー	政府地方機関を訪問し、状況を聴取した。

1月2日	キニヤ	市内の被災状況を調査した。 仮設診療所、避難所を訪問し、状況を聴取した。
1月3日		移動
1月4日	国家災害対策センター 日本大使館	調査結果を報告し、現状の課題及び今後の支援策について打合せを行った。
1月5日	帰国	—

5) 調査結果

(1) 国家災害対策センター

政府の災害対策の中核である社会福祉省国家災害対策センターでは、ニマル・ヘチアラッチ所長（元 ADRC 客員研究員）を含む10名程度の職員が情報収集の対応に追われていた。

(2) ヒッカドゥア

8両編成の列車が津波により押し流され、乗客約1,500名が犠牲となった。

近隣の住民の中でテレビによりスマトラ沖での巨大地震のニュースを見た者がいたが、津波襲来のことは念頭になかったとのことであった。

(3) ゴール

木造家屋の多くが全半壊していた。政府の地方機関は救援物資の分配に追われていた。目下の課題は飲料水とトイレの不足とのことであった。被災者は学校等に避難しており、その運営はボランティアが行っていた。

漁業従事者から、船と網を流されて生計手段が失われたので援助してほしいとの要望があった。

(4) トリンコマリー

政府の地方機関を中心に支援国の関係者を含む対策会議が開かれていた。住民から行政官までほとんどの人が「津波」という言葉さえ知らなかった。アジア防災センターから提示したパプア・ニューギニアでの津波パンフレットに興味を示した。

(5) キニヤ

海岸近くの病院が被災し、多くの患者が犠牲になった。避難所の運営を地方政府の職員1人が行っており、救援物資の配給が滞っていた。

6) 今後の課題

- (1) 津波を含む防災に関する基礎知識の啓発と教育
- (2) 中央政府及び地方行政機関の防災体制の強化

(3) 被災者の生計手段を確保するための援助



図 6-2-1-1 列車倒壊現場（ゴール）



図 6-2-1-2 被災病院の壁面の水跡（トリンコマリー）

6-2-2 タイ

1) 趣旨

2004年12月26日にインド洋で発生したスマトラ島沖地震に伴うインド洋大津波は、タイにも壊滅的な被害をもたらした。アジア防災センターでは、この津波による被害実態の把握のため、2004年12月30日から1月2日までタイ南部に羽鳥主任研究員及び中村研究員の2名をタイのパンガー県およびプーケット県に派遣し、タイ政府内務省防災局職員と協力し、現地調査を実施した。

2) 実施期間

2004年12月30日～1月2日

3) 調査団への派遣者

羽鳥友彦 (アジア防災センター 主任研究員)

中村晃子 (アジア防災センター 研究員)

4) 調査内容

現地ではタイ政府内務省防災局等から職員3名が合流し、協力しながら情報収集や復旧・復興対策の検討を行い、12月31日はパンガー県西海岸のカオラック村、ナムケム村、タクアパー市を、翌1月1日にはプーケット島西海岸のパトンビーチ、カマラビーチ、カロンビーチ、スリンビーチなどを視察した。

5) 調査結果

現地では、地震の揺れは感じたものの、地震による直接被害はなく、全ての被害が津波によるものであった。アンダマン海に面する6県のうち、最大の被害を受けたのはパンガー県で、次にプーケット県であった。とりわけ、カオラック村やプーケット島は外国からの集客地として知られており、死者・行方不明者に多くの外国人が含まれている。パンガー県カオラック村のホテルの損壊状況や地元での聞き取りの結果、津波の高さは第3波の約10mが最大であった。

一方、同県ナムケム村は漁村であり、高い建物は無いが、低地が内陸まで続いているため、沿岸部にとどまらず海岸から500m以上も津波が浸入して家屋を破壊し、多くの犠牲者を出した。損壊を免れた2階建ての建物の1階部分や周辺地の損壊が激しかったことなどから、津波の最大高さは4mから5mと考えられる。

プーケット島最大の繁華街であるパトンビーチでは、海に面したホテル、デパート、商店街の1階程度までが激しく損壊していた。2階建て以上の建物も多くあることか

ら、安全な高さに避難が可能であったにもかかわらず、実際には、地下1階や1階部分で多くの犠牲者が出た。また、津波発生前に、海面が沖合1kmほど後退した時には、潮が引いた様子を見に浜に出た人や、魚を採りに出た人々がおり、これらの人々が最初に津波に襲われたとの報告もある。

テレビなど地元メディアは、津波襲来30分前に「インドネシアで大地震発生」と伝えたが、その際に津波に関する警告は無かった。タイで地震の揺れを感じてから津波襲来まで、1時間半、テレビの情報から30分あったことから、早期警戒システムによる避難警報が出されていれば多くの人命が助かったと思われる。

調査終了後、当センターからタイ政府関係者あてに、1)多国間の災害情報共有、2) (外国人観光客向けを含む)自国内の情報伝達、3) 住民及び観光客の津波防災意識啓発、の三点が津波に対して安全な社会を作るために必要と提言した。



図 6-2-2-1 カマラビーチ（プーケット島）の被害

6-2-3 インドネシア

1) 趣旨

アジア防災センターでは、2004年12月26日にインド洋で発生したスマトラ島沖地震に伴うインド洋大津波による被害実態の把握のため、2005年1月7日から1月11日までインドネシア国アチェ特別州の州都バンダアチェに荒木田主任研究員を派遣し、バンバン・ルディアント氏（和光大学助教授、元ADRC主任研究員）及びインドネシア政府の協力を得て現地調査を実施した。

2) 実施期間

2005年1月7日～1月11日

3) 調査団への派遣者

荒木田勝（アジア防災センター 主任研究員）

バンバン・ルディアント（和光大学助教授、元ADRC主任研究員）

4) 調査内容

今回の調査は、

- ・ 被害の全体概要、状況の把握
- ・ 今後の災害対応への課題、支援策についての調査他

を行った。インドネシア政府側の協力機関は、BAKORNAS PBPであった。

(1) バンダアチェ現地対策本部（2005年1月8日訪問）

- ・ インドネシア政府の現地対策本部では、副大統領と常時テレビ会議回線が接続されていた。
- ・ 行方不明者・身元不明遺体の情報提供は、隣の建物で行っていた。
- ・ IBMが200台のPCを提供。ボランティアが被災者のデータを入力・更新する予定であった。
- ・ IKONOSやQuickBirdの画像が本部内に掲示してあった。

(2) バンダアチェ市内（津波被害無地域）（2005年1月8日訪問）

- ・ 空港には救助物資が山積みの状態。
 - ・ 空港から市内へと車で入り、市中心に近づくにつれ、構造物被害が増加するが、一見無被害の建物が多かった。
 - ・ RC造の大きなデパートが倒壊していた。しかし、その両側の建物には外から
-

わかる被害は無かった。

- ・ 被害を受けた建物を見ても、日本の地震の場合と比べ、窓ガラスの被害が少ないと感じられた。
- ・ 津波被害が無かった地域から電気が復旧しつつあった。水道は一部で復旧していたが、大部分は給水車に頼っていた。ガスはプロパンガスなので被害を受けていなかった。
- ・ 市内では市場が立つ状況まで復旧していた。
- ・ 街角で水、ジュース、ビール、菓子、タバコ等の物売りも見られた。



図 6-2-3-1 バンダアチェ市内の地震による被害

(3) バンダアチェ市内（津波被害有地域） （2005年1月8日訪問）

- ・ ホテルの区画は瓦礫に埋もれ、ホテル前に漁船が流されていた。建物の壁の痕跡を見ると、ここでの浸水高は3mを超えていたと推察された。



図 6-2-3-2 バンダアチェ市内の津波による被害

- ・ インドネシア国軍が道路の瓦礫除去を行っているが、雨季のため、個人住宅や商店、わき道の瓦礫除去は遅れていた。

- ・ 魚市場は完全に倒壊し、そばにある橋のもとには、多くの漁船の残骸が積み重なり、漁船のひとつは橋の上に乗っかっていた。
- ・ 水面から橋の高さを計算すると、この場所で7 m以上の津波があったと思われる。橋を渡ると、一面壊滅状態の風景が広がった。遠目では無被害に見えた建物も、近くによると、倒壊していないだけで全壊状態であった。津波来襲時にこの地域にいて生き残った人々は殆どおらず、学校や仕事などで市の中心部等にいた人々のみが生き残った。建物の2階の屋根まで津波が達したと言われた。約5 km先の海岸から椰子の木が根こそぎ流れてきていた。家の屋根が川を越えた対岸に流されていた。地震から20分後位に津波が押し寄せてきたという証言があった。
- ・ 一帯は魚の腐った臭いとヘドロの臭いが充満していた。火災が発生したという話は出ていなかった。

(4) バンダアチェ市内（避難キャンプ）（2005年1月9日訪問）

- ・ 大学生のボランティアがキャンプ場の運営に携わっていた。
- ・ 敷地内で目立っていたのは前大統領のメガワティ氏の名前入りテント（大型）



図 6-2-3-3 バンダアチェ市内の避難キャンプ

- ・ 地震発生時に家にいた。家財道具等が落下したが、建物は崩れなかった。大きな揺れに驚き、恐くなって、家の外に出た。地震から15～20分経って、「波が来る、逃げろ」という声が聞こえた。泳げないので急いで逃げた。後ろを振り返ると黒い波が見えた。1.5kmくらい走り、車に乗せてもらい、空港近くまで逃げた。
- ・ 地震発生時に家にいた。津波が来るのが見えたが、子供を連れて逃げられないため、家の屋根によじ登った。屋根の上で子供を抱き寄せ、津波の高さがどんどん高くなるのを見ていた。津波で車や木と一緒に流れてきて家に当り、

そのショックで子供が 1 人屋根から落ちた。津波は一度引いたので、屋根から下りて子供を捜したが見つからなかった。また津波が押し寄せてきたので再び屋根に上った。この波も再び引いたが恐かったために 5 時間位屋根の上
にいた。

- ・ 市内で仕事をしていて地震にあった。家に戻ろうとしたら、津波がやってきて帰れなかった。津波が引いた後、家の中や家の残骸から家族や貴重品を探した。地震から 3 日間は誰も外から救助や救援には来なかった。水も食料も無かった。電気も水道も切れていた。外からの情報が得られなかった。

5) 調査結果

- (1) 震源から 60km 離れたシムル島では、1907 年に大津波を体験し、「海水が引いたら高台に逃げろ」という教訓が伝統的な教えとして住民の間に語り継がれていたが、スマトラ島では教訓が残っていなかった。
→津波を含む防災に関する基礎知識を語り継ぐことの重要性
- (2) 海岸線から 5km 以上内陸部まで津波被害が発生している。
→並行避難の限界。複数階のビルを避難場所としての利用を前提とした公共施設の再建
- (3) 国軍と BAKORNAS、2 系統で情報収集している。死者、行方不明者、避難者それぞれの確認作業が進んでいない。途中経過の集計も遅れている。これから GIS を活用したデータ管理を開始する。
→迅速な情報収集体制、指揮命令系統の一本化が必要
- (4) 空港での物資の山、路肩に並ぶ国連世界食糧計画 (WFP) のトラック、夜間の運転を敬遠する運転手。国軍と反政府組織との争いは復旧活動へも影響を及ぼしている。
→国際的な支援活動の円滑化のために、安全に陸路を利用でき、復旧活動時に銃を持って見張りが立つことのないよう、停戦の確約が期待される。

6-2-4 モルディブ

1) 趣旨

2004年12月26日にインド洋で発生した津波は、インド洋の島嶼国モルディブを襲った。この津波による人的被害は次の通りである。死者82人、行方不明者26人、負傷者1,313人、避難者数(2004年12月26日現在)29,577人。総人口290,000人の同国にとって、この人的被害は深刻な問題である。199の居住島のうち、53島が大規模に被災した。特に、リゾート島の被害は観光産業に深刻な影響を及ぼしている。

アジア防災センターは、JICAのモルディブ調査団に参加した。調査団の目的は次の通りである。

- (1)モルディブにおける津波被害の現状を把握すること
- (2)日本の今後の支援のためのニーズアセスメントを行うこと

2) 実施期間

2005年1月26日～31日

3) 調査団への派遣者

栗田 哲史 (アジア防災センター 主任研究員)

4) 調査内容

月 日	調査箇所	内容
1月26日	マーレ着	—
1月27日	外務省外部資源局	調査日程の確認
	国家災害対策センター	以下の報告を受ける。 ・被災状況の説明 ・今後の対策(案)の説明
	マーレ島	日本のODAで建設された護岸構造物の調査
1月28日	ダール環礁ガメンドゥ島	地方島の被災状況調査
	ター環礁のヴィルフシ島	地方島の被災状況調査
1月29日	マーレ	レポート作成
1月30日	国家災害対策センター	防災体制に関する調査
	財務省	今後の支援に関する意見交換
	水産・農業省	漁業、農業の被災状況調査
	マーレ発	—

5) 調査結果

(1) マーレ島の調査

マーレ島の調査では、日本の ODA（政府開発援助）で建設された護岸構造物の調査を実施した。同島の全周に巡らされた護岸構造物は、マーレの街を津波から守ったと報告されている。調査の結果、津波による損傷などは見られず、護岸構造物の健全性が確認された。

(2) 地方島の調査

ダール環礁のガメンドゥ島およびター環礁のヴィルフシ島の現地調査では、漁民達の住居の多くが倒壊している様子が見られた。これらの住居は漁民自身によってコーラル・ストーン（珊瑚が堆積してできた石）と焼石膏（貝殻が原料）で建てられたため、津波に対しては脆弱である。一方、島の役場やモスク、学校などの公共建築物は、建築基準に基づいて建設業者によって建てられているため、殆ど被害を受けていない。

モルディブ国の最高標高は 1.5m であるため、常に高波に対する危険に曝されていると言える。今回の津波では、痕跡などから同国内で 2~3m の波が襲ったと見られている。

(3) 今後の対策

津波への対応策として、同国政府は「災害対策を考慮した島」開発計画を企画している。護岸を施したこの島は、緊急避難用の人工高台や複数階の公的建物などの安全区域を有している。将来は、ガメンドゥ島のような津波に脆弱な島の島民を、この安全な島に移住させる計画とのことである。モルディブ政府は、同計画への国際的な支援を期待している。



図 6-2-4-1 国家計画開発大臣（右から 2 番目）による被災状況の説明



図 6-2-4-2 マーレの護岸構造物



図 6-2-4-3 ター環礁ヴィルフシ島の倒壊建物

6-2-5 インド

1) 趣旨

2004年12月26日にインド洋で発生した津波は、インドにも壊滅的な被害をもたらした。アジア防災センターは、インドでの津波被害と現状を把握するために、インド政府と協力し、被災地調査を行った。

2) 実施期間

2005年3月2日～4日

3) 調査団への派遣者

角崎 悦子（アジア防災センター 主任研究員）

4) 協力者

インド政府内務省、タミールナドゥ州・救援部長、カッタロール区長、ポンディチェリー救援部長

5) 調査内容

2005年3月2日から4日にかけて、当センターはタミールナドゥ州およびポンディチェリー連邦政府直轄区の被災地を調査した。

インドでは、タミールナドゥ、ケララおよびアンドラ・プラデシュの各州、及びポンディチェリー連邦政府直轄区で、数千人が亡くなり、生活基盤や経済に甚大な被害を受けた。死傷者は10,000人を越え、5,000人が行方不明となっている。

インドの津波被害に対する救援活動は、国家レベルの中心組織としては内務省、州および直轄地区レベルでは救援委員会、地方では自治区により、効率的に調整されている。

このような救援活動を行っているのは政府だけではなく、国連機関、地元の組織や住民、NGO、また、民間企業なども被災地の必要性に応じている。現在、公共施設の再建、インフラ設備の復旧、損壊船舶の移動、被災者の健康管理などの短・中期的復旧・復興活動が調整・実施されているが、被災地全ての完全な復興までに課題は依然として多く、長期的復興計画も作成途中である。



図 6-2-5-1 被災した漁民の家
(ポンディチェリー連邦直轄地)



図 6-2-5-2 タミールナドゥ州政府によって
建てられた仮設ハウス

6-2-6 住民への意識調査の実施

UNESCO/IOC の主導のもと、インド洋周辺諸国での津波早期警戒システムの構築をはじめとするさまざまな災害軽減策が検討されつつあるが、これらの対策が有効に機能するためには、住民の地震・津波を含む防災意識の向上が不可欠である。アジア防災センターでは、文部科学省の科学技術振興調整費によるスマトラ島沖地震と津波被害に関する緊急調査研究の一環として、津波に関する危険地域の特定方法および津波に関する知識の普及・啓発方策を提言するために、被災国のコミュニティレベルの防災力の現状および地域特性を明らかにすることを目的に、津波被災国であるスリランカを対象に津波に関するアンケート調査を下記の通り実施した。

1) 調査内容

- ・ 一般住民への津波に関するアンケート調査（標本数：1,000 人）
- ・ 学童への津波に関するアンケート調査（標本数：1,000 人）
- ・ 行政官への災害対応に関する聞き取り調査（標本数：50～100 人）
- ・ 対象地域の被災状況調査
- ・ 調査の結果の分析を通して、スリランカにおいて効果的な情報伝達手法や住民への普及・啓発活動をおこなうための方策を提言する。

2) 対象地域

スリランカ南部、ゴール県（Galle District）の沿岸部 6 地域（DS division）

3) 調査期間

2005 年 3 月 1 日（火）～3 月 14 日（月）

（ゴール県での調査：3 月 2 日（水）～3 月 12 日（土））

4) 調査結果（3 月 22 日現在の集計による速報）

(1) 一般住民へのアンケート調査

23 人の現地調査員によって実施し、1,324 人より回答を得た。

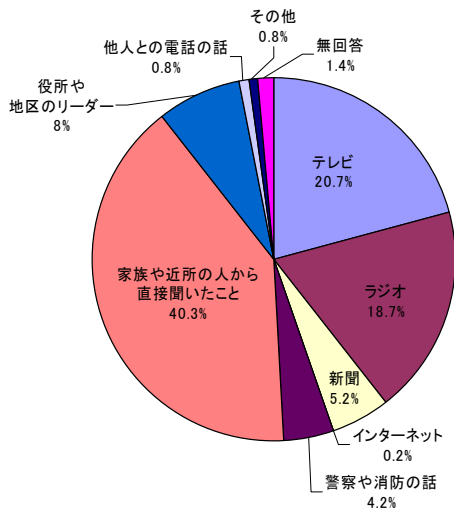
表 6-2-6-1 地域別標本数の比率

DS division	標本数の比率 (%)	住宅総数 (2001 年調査)
Benthota	10.2	11,801
Balapitiya	14.9	15,570
Ambalangoda	13.5	18,328
Hikkaduwa	22.1	23,838
Galle four Gravets	22.2	19,931
Habaraduwa	17.1	14,215



図 6-2-6-1 テントで生活する被災者（左）へのインタビュー

知りたかった情報を最もよく伝えたものという質問への回答



防災意識の向上に効果的だと思うものという質問への回答

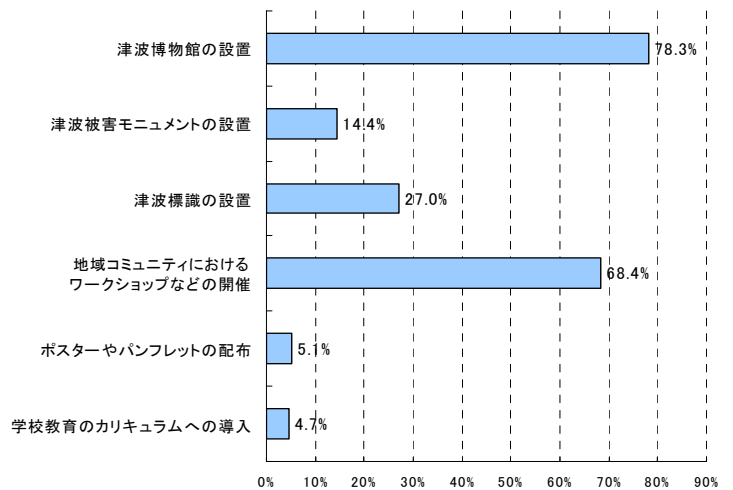


図 6-2-6-2 住民へのアンケート調査の回答例

19の質問項目により、対象地域住民の防災力のさまざまな面が明らかになったが、上図の回答結果に見られるように、今後学校教育での防災教育を推進していくことによって、住民全体の防災意識の向上をはかることが有効であると思われる。

(2) 学童へのアンケート調査

Grade 5 (10歳) の児童を中心に調査を実施。アジア防災センターの調査団員が各学校を訪問し、校長に調査を依頼した。調査用紙への記入は各校自身で実施してもらい、調査団員が再訪して用紙を回収した。回収数は下表の通り。

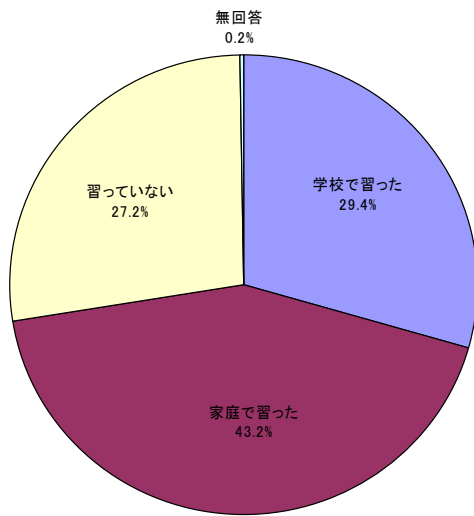
表 6-2-6-2 学校別アンケート回収数

学校名	地区名 (DS division)	回収した標本数		備考
		児童	教師	
Shariputra Maha Vidyalaya	Habaraduwa	51	2	
Uswatunhasana Maha Vidyalaya	Galle	28	1	ムスリム
Sudharma Maha Vidyalaya	Galle	66	1	
Southlands College	Galle	285	9	女子校
C.W.W. Kannangara Maha Vidyalaya	Galle	16	1	
Gintota Maha Vidyalaya	Galle	134	4	
Alloyseus College	Galle	270	5	男子校
Rohana Maha Vidyalaya	Habaraduwa	60	5	Grade 6
Mahamaya Balika Vidyalaya	Hikkaduwa	18	1	女子校
Peraliya Jinaratana Vidyalaya	Hikkaduwa	25	2	
Siddharta Madya Maha Vidyalaya	Balapitiya	55	2	Randombe Kanishtha Vidyalaya を統合
Hegalle Maha Vidyalaya	Balapitiya	77	2	
Martin Wickramasinghe Kanishtha Vidyalaya	Habaraduwa	27	1	
総 計		1,112	36	



図 6-2-6-3 アンケート用紙に記入する児童 (Habaraduwa 地区)

自然災害から身を守る方法に関する学習の有無



自然災害に関する勉強への要望

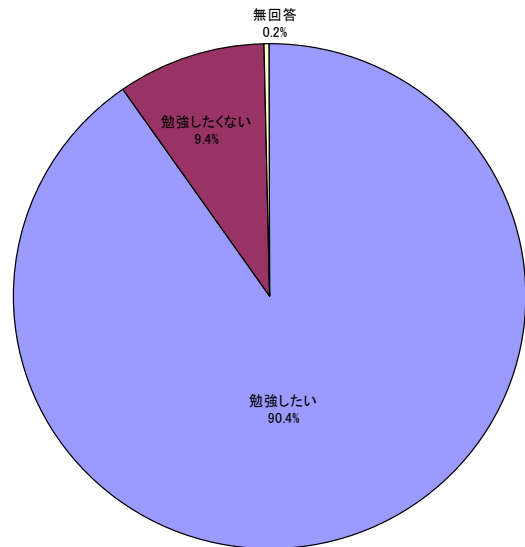


図 6-2-6-4 学童へのアンケート調査の回答例

12 の質問項目への回答で、対象地域の学童の災害・防災に関する知識についての現状が明らかになった。特に上図のグラフに見られるようにこれまで学校のカリキュラムの中での防災教育は不十分だったようで、今後の取組みの推進が求められる。

(3) 行政官への調査

① アンケート調査

アジア防災センターの調査団員が各組織の責任者に面会して、担当部局での調査を依頼した。調査用紙への記入は各組織で実施してもらい、調査団員が再訪して用紙を回収した。

表 6-2-6-3 組織別アンケート回収数

組織	面会者	回収した標本数	
NDMC	Mr. Hettiarachchi	18	
Administrative District of Galle	Planning	Ms. Piyadasa	9
	Education	Ms. Dahanayake	12
	Health	Ms. Gamage	15
	Police	Mr. Silva	8
	Navy	Mr. Somapala	16
DS division office	Ambalangoda	Mr. Ravindra	5
	Balapitiya	Mr. Ariyaratne	4
	Benthota	Mr. Jayalal	6
	Galle four Gravets	Mr. Gunawardena	7
	Habaraduwa	Mr. Samarasekara	5
	Hikkaduwa	Ms. Piyaratne	5
総計		110	

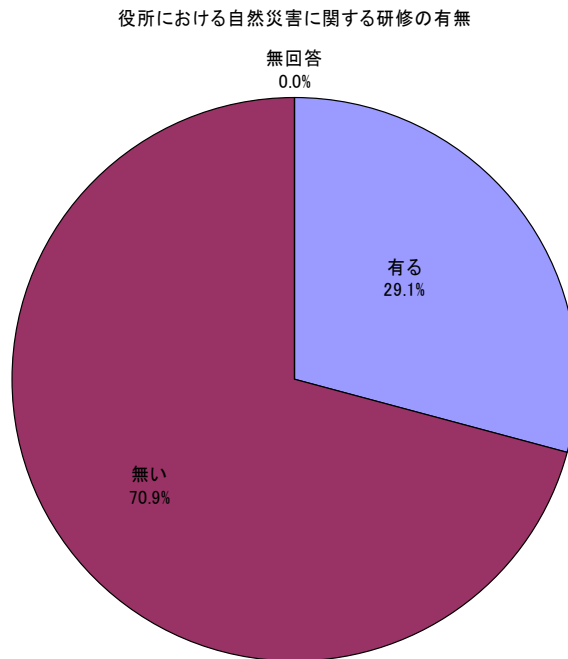


図 6-2-6-5 行政官へのアンケート調査への回答例

② 聞き取り調査

アンケート調査を依頼した際に、面会した責任者に対して聞き取り調査を実施した。

表 6-2-6-4 聞き取り調査一覧表

組 織	面会者		
	役職	氏名	
NDMC	Director	Mr. Hettiarachchi	
Administrative District of Galle	—	District Secretary	Mr. Hewavitharana
	Planning	Director	Ms. Piyadasa
	Education	Director	Ms. Dahanayake
	Health	Deputy Secretary	Ms. Gamage
		Deputy Provincial Director	Mr. Gunawardena
	Police	Senior Superintendent	Mr. Silva
	Navy	Commander	Mr. Somapala
DS division office	Ambalangoda	Divisional Secretary	Mr. Ravindra
	Balapitiya	Divisional Secretary	Mr. Ariyaratne
	Benthota	Divisional Secretary	Mr. Jayalal
	Galle four Gravets	Divisional Secretary	Mr. Gunawardena
	Habaraduwa	Divisional Secretary	Mr. Samarasekara
	Hikkaduwa	Divisional Secretary	Ms. Piyaratne

聞き取り調査の結果、多くの部署の責任者達が政府内のコーディネーション不足を感じており、また実際に被災民への対応をする立場にある地方レベルの行政官へのトレーニングが必要と認識していることが分かった。また、多くの責任者が被害軽減のためには、早期津波警報システムの整備を今後の重要課題として認識していた。

(4) 対象地域の被災状況

表 6-2-6-5 ゴール県沿岸 6 区域の被災状況 (2005 年 3 月 1 日現在)

No.	地区名 (DS division)	死者・ 不明者数 (人)	負傷者 (人)	被災者 (人)	避難民 (人)	住宅被害		避難キ ャンプ 数
						全壊	一部	
1	Galle	916	-	31,510	28,442	1,061	2,619	0
2	Habaraduwa	274	90	17,066	14,782	1,284	579	2
3	Hikkaduwa	1,342	-	59,973	59,973	3,164	2,236	14
4	Ambalangoda	59	132	4,343	2,906	348	176	3
5	Balapitiya	196	84	16,000	15,490	1,167	1,996	5
6	Benthota	18	-	1,000	333	8	74	-
計		2,805	216	129,892	121,926	7,032	7,680	24



図 6-2-6-6 海岸付近の被災家屋 (Hikkaduwa)



図 6-2-6-7 土砂が流出した地盤上に設営されたテント (Hikkaduwa)

被災地は緊急救援の時期を過ぎ、仮設住宅や恒久住宅の建設も着手されつつあったが、瓦礫の処理問題など、これまで経験したことのない広いエリアでの被災からの復興にはまだまだ課題も多く残されている。

(5) 調査結果の活用

インド洋地域内で検討されている津波早期警戒システムの構築においては「住民にわかりやすい方法で確実に伝達するシステム構築とそれが確実に避難行動につながる体制の整備・強化」を実現することが求められているところであり、今回の調査研究成果が活用できるものと考えている。また、本調査研究の成果をインド洋地域における住民レベルの津波防災活動へのパイロットスタディと捉え、他国・地域での応用も考えていきたい。